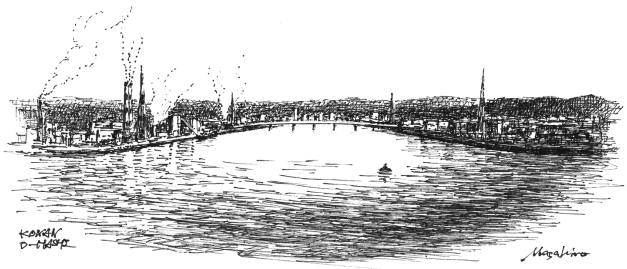
標点

文明の凶器

県立博物館長
山田寛人



平成二十四年の当館主催特別展「昭和のモノ語り」は好評を博し、激動の昭和を生き抜いた大勢のファンらで賑わった。私も幼小の頃使ったモノを懐かしく思った反面、わずか一世代前の物がすでに過去の遺物に感じるほど、近年の急速な進歩には驚くばかりである。人類の長い歴史の中で、人間の英知は偉大な発見や発明を繰り返し、人々の生活は著しく向上した。世界三大発明とされる火薬、印刷技術、羅針盤は言うに及ばず、旧石器時代の原始的な石器類から、近年のＩＴ革命とも言われる情報技術の進展など、時代時代に応じてあらゆる分野で進化を遂げ、最近ではＡＩ（人工知能）の研究も進み、最早、人間以外が何でもできる時代となったと言っても過言ではなかろう。

しかし、こうした文明の利器を使うのは人間であり、使い方を誤れば、一転凶器として人々に襲いかかる。エネルギーとして欠かせない原子力が第二次大戦では兵器として使われ、車社会の進展は人の行動範囲を大きく広げた反面、飲酒、暴走などの無謀運転は、人の命を突然奪う。

子どもたちの身近な問題としては、携帯電話やスマホである。調べ学習や緊急連絡、ＧＰＳ機能などで大いに役立つ反面、使い過ぎによる生活習慣の乱れや学力低下。ネットによる誹謗中傷は子どもの心を大きく傷つけ、本来は伝言機能であるはずのメールも、何分以内に返事がなければ無視やいじめの標的にされるケースも問題となった。

また、車の運転中にゲームに夢中になって死亡事故に至った事件も記憶に新しいが、町中で携帯電話やメールしながらの運転を見かけない日はないし、時に、子どもを助手席に乗せて操作しながら運転する親の姿。それらを日々目にする子どもたちだけに、ルールを守れといくら唱えても一体誰が聴くと言うのだろうか。

機器や技術がいかに進歩しようとも、人間の真似ができないものがあるとすれば、それは優しさや思いやり、正義感といった意思、感情、すなわち人の「心」というものであろう。正しい心をもって機器や技術を使うことこそが、文明の利器の機能を最大限発揮させるのであり、大人たちは、正しい姿を範として、子どもたちにしっかり示そうではないか。

文化財保護行政の使命は、文化財を守り、伝えて、文化財に親しむ機会を広げることである。子どもたちに、物を大切にすることだけでなく、物が産まれてきた目的や経過をきちんと伝え、正しく使うことを学ばせることも、博物館としての一つの役割かも知れない。